

Gulliverと馬

近藤 裕子

1. はじめに
2. ガリヴァーと馬
3. 馬介在療法
4. おわりに

1. はじめに

コミュニケーションにおいて言葉は欠かすことができない。しかしながら、手話以外のノンバーバル・コミュニケーション、すなわち表情などからも相手の気持ちを読み取ることはできる。犬などのペットを飼ったことのある人であれば、動物は人間の話す言葉に反応するだけでなく、私たちの表情や気持ちまでも理解していると感じることがあるであろう。近年、馬の表情認識能力に関する研究が相次いでなされている。人の表情、また声のトーンにまで反応するという。(Wathan 2016; Nakamura, 2018)

文学作品、またその作者の人生においてもさまざまな動物が登場する。18世紀イギリスの諷刺詩人、ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) においては、特に犬の存在が大きかったことを、以前考察した。(近藤, 2004) ポープの親しかった友人、スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) にとっては馬が特に大きな存在と考えられる。本稿においては『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1726) の中における馬について取り上げたい。

2. ガリヴァーと馬

『ガリヴァー旅行記』は4部構成になっていて、船医であるレミュエル・ガリヴァーが様々な国(架空の国々)を訪れる探訪記である。馬そのものが大きく関わるのは第4篇の馬の国(フイヌム国)であるが、最初に第1篇の小人の国(リリパット)に触れておきたい。

リリパットで馬はさまざまなおとこで描写されている。以下、いくつかの場面を引用する。

- ① These People are most excellent Mathematicians, and arrived to a great Perfection in Mechanicks by the Countenance and Encouragement of the Emperor, who is a renowned Patron of Learning. . . . Nine Hundred of the strongest Men were employed to draw up these Cords by many Pullies fastned on the Poles; . . . Fifteen hundred of the Emperor's largest Horses, each about four Inches and a half high, were employed to draw me towards the Metropolis, which, as I said, was half a Mile distant. (pp.26-27)
- ② That, six of his Majesty's greatest Scholars should be employed to instruct me in their Language; And, lastly, that the Emperor's Horses, and those of the Nobility, and Troops of Guards, should be exercised in my Sight, to accustom themselves to me. (p.33)
- ③ The Horses of the Army, and those of the Royal Stables, having been daily led before me, were no longer shy, but would come up to me very Feet, without starting. The Riders would leap them over my Hand as I held it on the Ground; (p.40)
- ④ [the Emperor] desired I would stand like a *Colossus*, with my Legs as far asunder as I conveniently could. He then commanded his General (who was an old experienced Leader, and a great Patron of mine) to draw up the Troops in close Order, and march them under me; the Foot by Twenty-four in a Breast, and the Horse by Sixteen, with Drums beating, Colours flying, and Pikes advanced. This Body consisted of three Thousand Foot, and a Thousand Horse. (p.42)

リリパットの人々にとっては巨人であるガリヴァーを首都まで馬で運搬していく様子 (①)、その後、ガリヴァーの目から見れば小さな馬たちが、大きな巨人であるガリヴァーの姿に怯えることのないように訓練されていく様子 (②、③、④) が描かれている。確かに大きさの違いはあるが、ここに描かれる馬たちの姿は、今日、私たちが目にする馬の様子と大きく変わることはない。しかしながら、第4篇に描かれる馬の姿は大きく異なっている。

- ⑤ About Noon I saw coming towards the House a Kind of Vehicle, drawn like a Sledge by four *Yahoos*. There was in it an old Steed, who seemed to be of Quality; he alighted with his Hind-feet forward, . . . (p.231)
- ⑥ I took a second Leave of my Master: But as I was going to prostrate myself to kiss his Hoof, he did me the Honour to raise it gently to my Mouth. I am not ignorant how much I have been censured for mentioning this last Particular. Detractors are pleased to think it improbable, that so illustrious a Person

should descend to give so great a Mark of Distinction to a Creature so inferior as I. (p.282)

馬の国では馬は気高く理性的な存在として描かれ、人になぞらえられている野蛮な動物ヤフーはその支配下にある。引用⑤ではヤフーが馬を轎に乗せて運ぶ。⑥のガリヴァーがこの国を去るにあたって、仕えていた馬（ガリヴァーの主人）と別れる場面では、ガリヴァー自身が蹄にキスをするべく身をかかめようとする。アメリカを代表する詩人の1人フロスト（Robert Lee Frost, 1875-1963）の作品¹⁾を知るものにとっては、人と馬の関係の逆転の構図をここに見ることであろう。

『ガリヴァー旅行記』は単なる旅行記、不思議な国の探訪記ではなく、当時のイギリス社会を諷刺した作品として知られている。第2篇の巨人の国（プロブディンナグ国）において、ガリヴァーは高邁なる国王にさまざまに18世紀当時のイギリスを数回にわたってレクチャーするのだが、最後に国王は下記のように結論づける。

I cannot but conclude the Bulk of your Natives, to be the most pernicious Race of little odious Vermin that Nature ever suffered to crawl upon the Surface of the Earth. (p.132)

このような害虫がのさばるイギリスへとガリヴァーは、最終的に馬の国から渋々ながら戻ることになるのである。ガリヴァーは馬の国で遭遇した、馬たちの美德によって自分が影響されたことを認めている。

But I must freely confess, that the many Virtues of those excellent *Quadrupeds* placed in opposite View to human Corruptions, had so far opened mine Eyes, and enlarged my Understanding, that I began to view the Actions and Passions of Man in a very different Light; and to think the Honour of my own

1) “Stopping by Woods on a Snowy Evening”の中にある次の詩行。寒い夕暮れ、家への道すがら、ふと立ち止まった飼い主を心配するかのように首の鈴を鳴らしてみせる馬の姿が描かれている。

My little horse must think it queer / To stop without a farmhouse near / Between the woods and frozen lake / The darkest evening of the year. / He gives his harness bells a shake / To ask if there is some mistake. (フロスト, p. 142)

『ガリヴァー旅行記』の馬の国において、ヤフーは唾棄すべき存在として登場している。近藤は30年余り前、鳥取県の倉吉博物館において、厩を守るサルのみイラを学芸員の方に見せていただいたことがある。馬の国では馬と類人猿（ヤフー）はあくまで理性と野生の相容れない関係にある。みイラはこの関係性とは異なるが、多くの動物がいる中で、この2つの動物の関係が洋の東西を問わず取り上げられていることに関心を覚える。

日本において家畜である馬を神の乗り物、また馬頭観音として神聖な扱いをしてきたことは知られている。また猿が人に馬の扱いを教え、馬の守護神的な役割を果たした説も伝えられている。(佐藤, pp.133-35)

Kind not worth managing; which, besides, it was impossible for me to do before a Person of so acute a Judgment as my Master, who daily convinced me of a thousand Faults in my self, whereof I had not the least Perception before, and which with us would never be numbered even among human Infirmities. I had likewise learned from his Example an utter Detestation of all Falsehood or Disguise; and *Truth* appeared so amiable to me, that I determined upon sacrificing every thing to it. (p.258)

ガリヴァーは、馬の国には永住を許されず、イギリスに帰国するが、妻に対してもヤフーを思い出して、最初の1年間は妻や子供たちが近くに寄ってくることに耐えられない状態にあった。彼が最初に買ったのは2頭の馬である。

My Horses understand me tolerably well; I converse with them at least four Hours every Day. They are Strangers to Bridle or Saddle; they live in great Amity with me, and Friendship to each other. (p.290)

妻を遠ざけ、馬と親しく会話するガリヴァーの姿は滑稽に映るかもしれない。様々な国をめぐって、経験、知識を深めてきたはずのガリヴァーが最後に到達したのは、自らの同胞に対する深い絶望感であった。勧められて航海記を出版したものの、でっち上げた話として受けとめられたからである。

I must freely confess, that since my last Return, some corruptions of my *Yahoo* Nature have revived in me by Conversing with a few of your Species, and particularly those of mine own Family, by an unavoidable Necessity; else I should never have attempted so absurd a Project as that of reforming the *Yahoo* Race in this Kingdom; but, I have now done with all such visionary Schemes for ever.

(p. 8, in "A Letter from Capt. Gulliver, to his Cousin Sympson")

馬の国の馬たちのことを懐かしく思いながら、苦痛・ストレスを感じつつ、元の暮らしに戻ったガリヴァーに救いはないのであろうか？

3. 馬介在療法

心的傷害を克服するセラピーとして動物療法は知られている。馬のセラピーというと、アメリカ映画、*The Horse Whisperer* (1995年原作、1998年映画化) を想起されるかもしれない。ささやく人の方は馬の心に寄り添って馬をいたわる人であるが、本稿で問題にしているのは、馬によって人間の心が癒されるケースである。

2013年10月17日のニュースでBBCはIFEAL (International Foundation of Equine Assisted Learning)²⁾が、北アイルランドやボスニアで兵役についていた元兵士のPTSD (post-traumatic stress disorder、心的外傷後ストレス障害) に対して、馬を介する療法を行っていることを紹介している。IFEALのスタッフはインタビューの中で以下のように答えている。

...the stabilisation that the horses offer, um, to calm these veterans down when especially they've got a lot of, um, mental war injuries, you know, that they're coming back with. This work really helps them to sort of feel solid and safe again. (Knowles, p.40)

またスザンナ・フォーレストは、アメリカの退役軍人に対する馬介在療法を紹介しているが、その中で、馬と人間の遺伝子レベルについて述べ、その共通性が人と馬の調和、協調性を生み出すものになっているという。

犬は人の「最良の友」であり、最も早く家畜化された動物だが、人は遺伝子レベルで犬よりも馬と共通点が多い。人と馬の顔の筋肉の配置は似ている。馬は人ほど表情が豊かではないものの、人の類縁であるチンパンジーよりも多くの表情を有する。馬やその他の様々な動物の体内にあるオキシトシン、コルチゾール、テストステロン、エストロゲンといったホルモンは、人の体内にもある。これらのホルモンは行動や反応に影響を与える。(フォーレスト、p.396)

イギリスに戻ったガリヴァーにとって、馬たちとの会話は、自分の心の安定、ストレス解消になくはならないものだった。ただ、この馬たちは馬の国にいた特殊な馬たちとは異なり、私たちの知る普通の馬たちではあったのだが。

4. おわりに

スウィフトの友人、ポウプは『愚物列伝』(*The Dunciad*, 4巻本、1743)の中で、三文文士たちによって毒されている18世紀当時の文壇、社会を手厳しく諷刺した。その終幕は愚鈍の女神によって、闇・混沌の帝国が復興するというものであり、18世紀の理性尊重の時代、啓蒙主義の象徴となっている光の世界に対するアンチテーゼとも読み取ることができる。

2) ホースセラピーを行う同様の団体として、Community Association for Riding for the Disabled (CARD、北米)、Cheff Therapeutic Riding Center (ミシガン州)、Professional Association of Therapeutic Horsemanship International (コロラド州) をKnowlesは挙げている。(p.39)

Nor *human Spark* is left, nor Glimpse *divine!*
Lo! thy dread Empire, CHAOS! is restor'd;
Light dies before thy uncreating word:
Thy hand, great Anarch! lets the curtain fall;
And Universal Darkness buries All. (Book IV, ll.652-656)

確かにスウィフトも、『ガリヴァー旅行記』の中で当時のイギリスの政治、社会に対する諷刺を行っている。また糞尿譚のエピソードはスウィフトにおいてもポウプ³⁾においても指摘できる。ガリヴァーの排泄に関する記述は小人の国のリリパットと巨人国、プロブディンナグ国においては、大いに異なっている。

I had been for some Hours extremely pressed by the Necessities of Nature; . . . I went as far as the Length of my Chain would suffer; and discharged my Body of that uneasy Load. . . . as soon as I rose, to perform that Business in open Air, at the full Extent of my Chain; and due Care was taken every Morning before Company came, that the offensive Matter should be carried off in Wheel-barrows, by two Servants appointed for that Purpose. (p.29)

. . . and taking me up again in her Hand, walked into the Garden where she set me down. I went on one Side about two Hundred Yards; and beckoning to her not to look or to follow me, I hid my self between two Leaves of Sorrel, and there discharged the Necessities of Nature. (p.94)

小人たちにとっては、汚物の処理は大仕事であるが、巨人の国では、特段取り上げる必要もない、些末なこととなる。ガリヴァーの大きさは2つの国において、その絶対的な大きさ（物理的な大きさ）に変化はない、ただ周りの状況に応じて、相対的な大きさが問題になっているのであり、この排泄の描写は視点を変える重要性を説いているとも解釈できる。ポウプの場合、当時の三文文士たちはポウプに諷刺されることで名前が残ったともいわれ、彼らがもはや存在しなくなった今、実際の人物と作品内の人物を比べる楽しみは薄れてしまっている。ここからポウプの諷刺は時代性を打破できない一方で、スウィフトの諷刺は普遍性に通じると考えられているのである。⁴⁾

3) 『愚物列伝』の中で愚鈍の女神は愚物たち（三文文士）に汚水の中に飛び込むように命令している。(Book II, ll. 271-282)

4) ここでは論じないが、第3篇においてガリヴァーは不死の人 (*Struldbruggs*) に遭遇する。不死ではあっても不老ではないため、悲観的な側面がある。この問題は医学の進んだ今日の長寿社会の問題点ともつなが

確かに人は光を認知することで漆黒の闇を認識できると言えるのであるが、ポウプの『愚物列伝』の終幕に描かれる闇は、単純に読めば、真っ暗で、そこには救いの可能性は微塵もない。ブラックホールのような闇に似ているとしたら、光さえもその中に吸い込まれてしまう。

スウィフトの『ガリヴァー旅行記』において、ガリヴァーは自宅に戻るが、確かにヤファーに似ている人間たちで溢れているイギリス社会に対する絶望でこの作品は終わっているように見える。⁵⁾しかしながら、馬を飼い、馬語で彼らと話すことによって、心・精神の安定感を取り戻せる可能性を否定することはできないのである。船医でもあったガリヴァー自身は、馬によるセラピーとは考えなかったであろう。たとえ絶望感に彩られた結末であったとしても、一筋の光明をそこに見出すことができるのではないだろうか。

参考文献

- 近藤裕子 [2004], 「Popeの素顔 (2) 一愛犬バウンスをめぐる」, 『東洋大学紀要・言語と文化』, 第4号.
 佐藤健一郎・田村善次郎 [2018], 『十二支の民俗説』, 東京: 八坂書房.
 スウィフト [2013], 富山太佳夫 (訳), 原田範行 他 (注釈) 『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈』, 東京: 岩波書店.
 チェンバレン, J. E. [2014], 屋代通子 (訳), 『馬の自然誌』, 東京: 築地書館.
 富山太佳夫 [2000], 『『ガリヴァー旅行記』を読む』, 東京: 岩波書店.
 フォーレスト, スザンナ [2017], 松尾恭子 (訳), 『人と馬の5000年史』, 東京: 原書房.
 フロスト [2018], 川本皓嗣 (編), 『対訳フロスト詩集』, 東京: 岩波文庫.

Badcock, Christopher [2017], "Gulliver's Travels: Another Classic Portrayal of Autism", *Psychology Today*: www.psychologytoday.com

Knowles, Timothy, et al. [2015], *Seeing the World through the News 2*, 東京: 金星堂.

Nakamura, K., A. Takimoto-Inose, and T. Hasegawa [2018], "Cross-modal perception of human emotion in domestic horses (*Equus caballus*)", *Scientific Reports*: www.nature.com

Pope, Alexander [1963], Sutherland, James (ed.), *The Dunciad*, London: Methuen.

(『愚物列伝』の引用はこの本に所収されている4巻本のテキストからとし、末尾に詩の行数を記す。)

Swift, Jonathan [1726], Davis, Herbert (ed.), *Gulliver's Travels*, Oxford: Basil Blackwell. (別記しない限り、『ガリヴァー旅行記』からの引用はこの版によるものとし、引用末尾にページ数を記す。)

ると考えられるのである。

- 5) 『ガリヴァー旅行記』の書かれた当時は、体液による気質や性格の分析は行われていたが、いわゆる今日のような心理学や精神医学は未だ、発展してはいなかった。BadcockはM. Fitzgeraldのスウィフトにはアスペルガー症候群と共通するものがみられるという説を紹介しながら、スウィフトには今日言うところの自閉症の感があるのではないかと推測している。あくまで登場人物は作者が作り出したペルソナであり、作者と完全に重ね合わせることはできないが、ガリヴァーには確かに作者であるスウィフトの精神性の一面が反映されていると考えられるのである。

Wathan, J., L. Proops, K. Grounds, and K. McComb [2016], “Horses discriminate between facial expressions of conspecifics”, *Scientific Reports*: www.nature.com